

放射能による環境汚染下での心の除染 ～環境の除染は心の除染に役立つのか？～

竹西 亜古

兵庫教育大学大学院

放射能汚染に対する被災者の心を取り上げるとき、不安・安心の視点に立った報告や研究は数多くある。しかし、本報告は、あえてそのような視点を取らない。その上で被災地域の人々の心の除染がどのように進みつつあるか、あるいは滞っているのかを、社会心理学の理論と実験から考えてみたい。さらに、これらの作業を通じて「環境の除染は、心の除染に役立つのか」を参加者と共に考えていきたい。

本報告が、被災地域の人々の心のプロセスを捉えるキーワードは「認知」であり、「情報」である。前半部では、社会心理学の認知的不協和理論を紹介し、被災地域の人々の心の動きを捉える試みを行う。そこからは、放射能汚染に対して「なんとかやっていく」ために、それぞれの人がありとあらゆる認知要素を援用し、心理的不快感を減らそうとしている姿が浮かび上がってくる。そのような中で、環境の除染は、認知的不協和の低減に一定の役割を果たしたといえよう。しかし、被災者一人一人がなした不協和低減においては、それぞれに独自の認知要素が必要不可欠であったと思われる。そして、その人独自の認知要素、つまり人それぞれの「思い」が、「福島で生きる」ことの原因や意味を作り出しているとも考えられる。

後半部では、科学的情報に対する一般人の記憶に関する実験的研究を概報する。放射能に関する科学的情報は、人々に理解され記憶にとどめられてこそ、認知的不協和低減に用いられる認知要素となる。そこでここでは、一般の人々が、得られた科学的情報のうち、どのようなものを正しく記憶し、どのようなものを間違えて記憶しやすいかを検討した心理学実験を紹介する。放射線に関する科学的な記述文を実験参加者に提示し、その後、正しい情報と間違った情報が混在する再認テストを受けてもらった。その結果、放射線の仕組みや働きに関する情報の方が、線量やその大きさを表現した数値の情報より、記憶に残りやすいことが明らかになった。

この結果は、一般の人々に科学的情報を提供する際に、なぜそのようなことが起きるか（科学的メカニズム）をわかりやすく示すことが極めて重要であることを示している。加えて心の除染を考えると、この事実は、県外避難者に対する情報提供に関する示唆を与えうる。福島へ戻ろうかと考えたとき、人々の多くは、まさに認知的不協和を抱え、それを低減する必要に駆られる。そのような人たちに向けて、単に線量の数値的变化だけではなく、除染の仕組みや働きについてしっかり伝えることが、不協和低減に役立つだろう。